



《編集部ルポ》

ハンセン病の歴史を訪ねて

のだ。そして、隔離された療養所での生活は、劣悪を極めた。

当時の生活のことを笹雄二さんは語る。

「収容した療養所では、重症者の看護、眼や手足の不自由な人の介護、そして食事運搬や土工、木工、さらには、亡くなった僚友の火葬までも、入所者に強制的にやらせたのです。また、療養所内での結婚を条件として子供が産めない手術を強制されたりしました。さらにこうした措置に不満をもらせば、次々と療養所内の監禁所に入れられました。栗生楽泉園には、全国のハンセン病患者を対象とした「特別病室」という名の重監房があり、零下20度にもなる極寒の環境下で食事もなく与えられずに、たくさんの方が亡くなったのです。」（ハンセン病の向こう側「発行・厚生労働省より抜粋」）

◆社会との隔離

資料館を出て、隣の全生園を散策する。急に汗が噴きだす。全生園を歩いていると、生け垣が続いているのに気づく。そうなのだ、



▶隔離のために植えられた生け垣

西武線清瀬駅からバスで10分ほどで、国立ハンセン病資料館に着く。暑い夏の盛りの日だった。汗を拭いても拭いても、滴り落ちてくる。資料館の中に入るとクーラーが適度に効いていて、そこは天国だった。今日是一日、ハンセン病に関わる取材を行う。この資料館の近くに多磨全生園がある。今も多くの入所者が、そこで生活をしている。

◆ハンセン病とは

ハンセン病を知っているだろうか？ ハンセン病は、らい菌に感染したことで起こる病気である。主に手足の末梢神経がマヒしたり、汗が出なくなったり、熱や痛みも感じなくなる。1873年にらい菌を発見したノルウェーの医師、ハンセンの名前をとってハンセン病と呼ばれている。らい菌は、感染力が非常に弱く、うつりにくい病気だ。たとえ感

染しても発病することはまれなことだ。感染と生活環境や衛生環境、医療環境などの条件が重なって発病する病気だと言える。

◆差別を受けたハンセン病患者

しかし、近代になっても、ハンセン病を理由に、故郷を追われ、親族の縁も切られ、全国を放浪する人もいた。1930年代、まさに日本が戦争へ向かおうとしていた時代だ。この辺りは、松本清張原作、映画『砂の器』でも描かれている。加藤剛の息子役の演技と加藤嘉の父親役の演技。ともに忘れられない名演技だった。

ちょうど、映画で描かれた時代は、療養防法が成立した1931年ぐらいのこと。この法律の下に、国を挙げてハンセン病患者を全国13の療養所へ収容する施策がとられた。無頼運動という国主導の隔離政策が始まった

◆名誉回復を求めて

1996年に、国は、「らい予防法の廃止に関する法律」を制定する。しかし、国の動きは、あまりにも遅かった。1998年、熊本地裁で「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」が提起され、東京や岡山でも提訴が続く。そして、2001年に熊本地裁での原告勝訴の判決が下された。小泉内閣の時に、国は、控訴断念を決める総理大臣談話を発表し、国には、入所者に謝罪し、名誉回復や社会復帰支援の活動などに取り組んでいるのだ。全生園のなかには、食堂もある。「あ、この食堂どこかで見たなあ」と思ったら、映画

『あん』で、樹木希林と市原悦子が、永瀬正敏と会っていた食堂だ。映画『あん』で描かれていた現在も続く差別の問題。それは、映画のなかの話だけではない。

熊本地裁での判決の後にも、同じ熊本のホテルで、療養所入所者に対する宿泊拒否事件が起こるなどしている。入所者に対する差別や偏見の眼はまだ根強く残っている。そして、一番身近な親族の元へ戻れない入所者も多い。

入所者にとつての故郷。故郷への思いなど、今まだ続く差別のことも含めて、入所者の平沢保治さんにインタビューをした。

全生園は、生け垣に周囲を覆われている。昔は、4メートルの高さの生け垣と土の堀があったそうだ。療養所内から外へ逃げ出せない仕組みの一つだった。つまり、生け垣が全生園と一般社会を分けていた。生け垣は今もある。しかし、昔と違うことは、高さは、1メートルちょっとほどに刈り込まれて、見通しも良くなったことだ。

「生け垣が低くなって、見通しが良くなった。でも、心の中の垣根はなくなっていなかった」。当時のことを回想して、平沢保治さんは語っている。物理的な障壁はなくなっても、今もまだ、心のなかの障壁は続いている。

◆戦後をむかえて

1945年の敗戦。民主化の波が日本にも押し寄せたが、全生園の生活は変わらないどころか、さらに差別が固定化されていく。

1953年に療養防法は、らい予防法として改正される。この時の改正では、大きな問題点があった。それは、当時すでにハンセン病は、薬で治るとわかっていたにもかかわらず、強制的な隔離を続けて退所規定もなかったことだ。つまり、一度入所すると一生そこから出ることでないことを意味していたのだ。そういうなかでも、少しでも療養所内の暮らしを良くしようという運動は続けられていた。しかし、あまりにも長い時間の療養所生活が続くなかで、療養所から外の社会での生活に不安を抱く入所者も多かった。今の自分たちの暮らしと人間としての尊厳。そんな問題のはざまのなかで、入所者たちは、声をあげる。



▶入園者自治会の入口



▶いのちとこころの人の森の森宣言の碑